

# 都心部の屋外パブリックスペースにおける滞在快適性に関する研究 — 丸の内仲通りを対象とした滞留空間の利用実態と質的評価—

1982063 山口 佳恋

指導教員 高見沢実教授 野原卓准教授 矢吹剣一准教授 尹莊植助教授

## 1. 研究の枠組み

### 1.1. 研究背景・目的

近年、都市空間の使われ方は多様化が進んでいる。我が国では2010年頃から「働き方改革」の導入や「ワークライフバランス」を重視する傾向が強まる中で、都市の中で自由に空間を選択し、創造的な交流が行われるような「サードプレイス」の考え方が広まっている。このような空間には、あらゆる人にとって居心地が良く、緩やかなつながりがあることが重要であるといえる。

この背景を踏まえて、本研究は都心部の屋外パブリックスペースについて、滞留の実態及び滞在快適性に対し、街路の空間特性が及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

### 1.2. 研究方法

図1に示すように、(i)空間分析(ii)滞留調査(iii)滞留者アンケート調査を実施し、これらを比較分析することにより、空間特性が利用実態と質的評価に与える影響および利用実態と質的評価の関係を明らかにする。

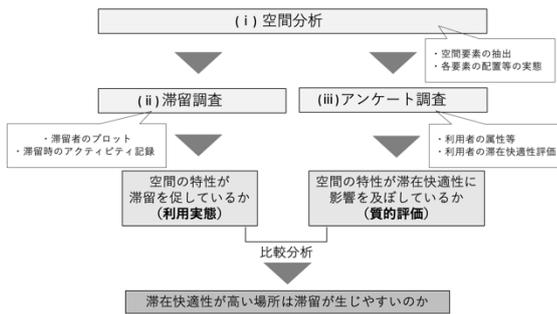


図1. 研究のフローチャート

## 2. 研究対象と「滞在快適性」の定義

### 2.1. 研究対象地

本研究は、東京都丸の内仲通りを研究対象とする。丸の内エリアは、業務機能中心だったまちに多様な都市機能を導入し、活力を生み出すことで、街路が歩行者の滞留空間として利用されている先進的な事例であるといえる。

### 2.3. 「滞在快適性」の定義

本研究では、「滞在快適性」を「人々がその場所で滞在する際に、心身に不快に感じられるところがないか」と定義する。一般的にこの「滞在快適性」は、空間の面積やファニチャーの設置状況、屋根や日除けの数等の空間条件と、気温や天気、明るさ等の環境条件によって左右されるが、本研究では、前者の空間条件を研究対象とする。

また、2010年にヤン・ゲールが提唱した「12の質的基準」

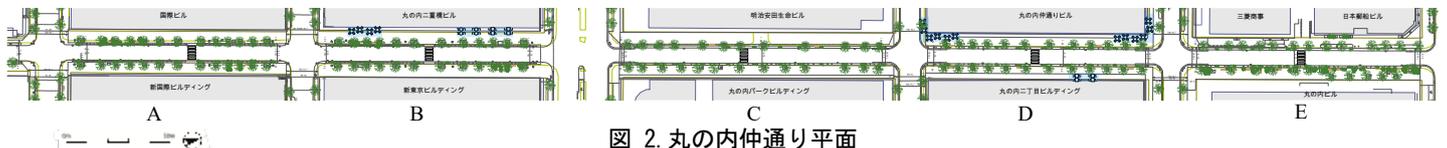


図2. 丸の内仲通り平面

は、公共的な歩行者環境の質の基準となるものであり、広場や街路の評価に広く用いられている。この中で街路空間の評価指標として適切なものを抜き出し、さらに自分が丸の内仲通りの評価に必要なだと考える質的基準を加え、本研究における街路空間の滞在快適性評価指標とする。

表1. 滞在快適性指標

滞在快適性の指標	指標のポイントとなる空間要素
① 空間の開放感	歩道の広さ/セットバック/車道の滞留空間
② 沿道の一階部分	飲食店のテラス席/ウィンドウショッピングの店舗/建物のラインが揃っている/ガラス張りのファサード
③ 緑	視覚的美しさ/風や日射を和らげる/手入れの状況/配置間隔
④ ファニチャー	利用の気軽さ/複人数で利用しやすい配置/設置間隔/行為に適しているか
⑤ 周囲との関係	通行人の視線/プライバシー/他者とのつながり/静かさ

### 2.2. 丸の内仲通りの空間特性

丸の内仲通りは街路によって5つのエリアに分けることができ、本研究の中でこれをA-Eエリアと呼ぶ。(図2)表1で示した指標に基づき、各エリアでセットバックの状況や植栽の設置、ベンチ設置数等の空間要素を抽出し表2にまとめた。それぞれ異なる空間特性を持つことがわかる。

表2. 各エリアの空間特性

		A	B	C	D	E
空間の開放感	セットバック(西/東)[mm]	1000/1000	1600/1000	4200/300	300/700	1000/5500
	車両通行止め	アーバンテラス実施時(平日11時-17時、休日11時-17時)				
沿道の一階部分	飲食店のテラス席	なし	3店舗	なし	3店舗	なし
	街路樹の数[本]	26	24	25	24	26
緑	植木鉢の数	43	38	24	18	69
	植栽帯の幅(西/東)[mm]	1700/2200	1700/2200	2500/2300	2000/2200	2000/5500
ファニチャー	ベンチの数	大5、小6	大3、小2	大2	大5	大13
	アーバンテラスの実施有無	有	有	無	有	無
周囲との関係	建物出入り口の数	17	18	12	20	8

## 3. 滞留調査

### 3.1. 調査概要(表3)

表3. 滞留調査概要

調査日程	11月25日(金)、26日(土)の2日間
調査時刻	9時/12時/15時/18時
調査方法	丸の内仲通りにおいて「滞留」している人とその滞留者のアクティビティ(食事/付む/会話/携帯・スマホ操作/仕事・パソコン操作/遊び/写真撮影/その他)を地図上にプロットする。 <sup>注1</sup>

### 3.2. 分析[滞留実態](図3)

エリアによって滞留者の人数に大きな違いが生じていることがわかる。Cエリアは合計滞留者が平日は8人、休日は13人であるのに対して、Eエリアは平日が70人、休日は81人であった。この人数の差に最も大きく関わっている空間要素は着座装置<sup>注2</sup>の数であり、「ファニチャー」は「滞留に必要なもの」であることが分かる。

また、特にA,D,Eのエリアで12時には飲食の滞留者が増

加する。これはアーバンテラス<sup>注2</sup>を飲食エリアとして有効に利用している人が多いからだと考えられる。このことから、ファニチャーと歩行者空間の拡張によって、飲食を伴う滞留が発生していることがわかる。

#### 4. 滞留者アンケート調査

##### 4.1. 調査概要(表 4)

表 4.滞留者アンケート調査概要

調査日程	11月25日(金), 26日(土), 28日(月), 30日(水)の4日間
調査時刻	9時-18時
調査方法	丸の内仲通りに滞在している人に対し、QRコードを提示(或いは配布)しGoogleフォームを使用したアンケートへの回答を呼びかける。

##### 4.2. 分析[滞留者による滞留空間評価]

###### i エリアごとの分析(図 4)

滞在快適性の総合評価は、Dが4.55と最も高く、A,Eがともに4.00と最も低かった。Dは、飲食店のテラス席が街路にはみ出しており、賑わいの面においては高評価であったが、周囲との関係において「通行人の視線が気になる」等の負の要素にもなっていることがわかった。Eは沿道の設えによる賑わいは低評価であるが、セットバックによる歩道空間のゆとりや、豊かな緑が高評価を得ていた。

###### ii 快適性指標ごとの分析(図 5)

各快適指標の評価と滞在快適性の総合評価の相関を見ることで、どの快適性指標が最も大きな影響を与えているのか分析する。それぞれの相関係数を求めると、「空間の開放感」が0.32、「沿道の一階部分」が0.39、「緑」が0.50であり、3項目について正の相関が見られた。「ファニチャー」は0.19、「周囲との関係」は0.02であり、2項目は滞在快適性への相関が見られなかった。特に「緑」「沿道の一階部分」

の相関が強かったことから、景観を形成している空間要素は、「滞留の満足度を高めるもの」であるといえる。

#### 5. 2つの調査の照合分析

今回の調査では滞留の実態と滞在快適性評価の関係について、評価が高い場所ほど滞留に使用されているという明らかな相関は見られなかった。エリアごとに二つの調査結果を比較すると、合計の滞留者数はE>D>A>B>Cの順に多いのに対して、滞在快適性の総合評価はD>C>B>A>Eの順に高く、特にEエリアに関しては滞留者数と滞在快適性に大きな差異が生じていた。滞留が生じている場所はその分、人が多く落ち着かないなど、空間要素が複雑に関係しあって滞在快適性を左右していることが考えられる。

#### 6. 結果・考察

3.2と4.2の分析より、屋外パブリックスペースには、大きく分けて「滞留に必要なもの」と「滞留の満足度を高めるもの」の2種類の空間要素が存在していることが明らかとなった。滞留したくなる空間条件としては、滞留に必要な「ファニチャー」が大きな影響を与えており、空間特性が滞在快適性に及ぼす影響としては空間の満足度を高める「空間の開放感」「沿道の一階部分」「緑」が大きいことが分かった。これらの空間要素が複雑に関係しあって滞在快適性を左右しているといえる。

##### 参考文献

1. 大手町・丸の内・有楽町まちづくり懇談会(2021年3月)「大手町・丸の内・有楽町地まちづくりガイドライン」
2. ヤン・ゲール著、北原理雄訳(2014)『人間の街 公共空間のデザイン』、鹿島出版社

注1) 複数のアクティビティをおこなっている場合には、滞在をカウントした瞬間に最も比重が高いと考えられるものを観察者が判断。  
注2) アーバンテラス：丸の内仲通りで実施されている車両を一時通行止めにし、滞在空間をつくる取り組み

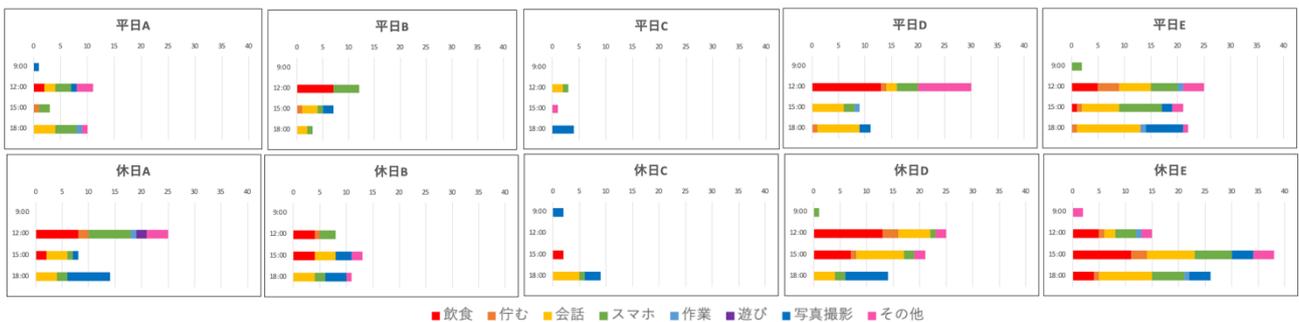


図 3. 滞留調査結果



図 4. 滞在快適性評価 (エリア別)

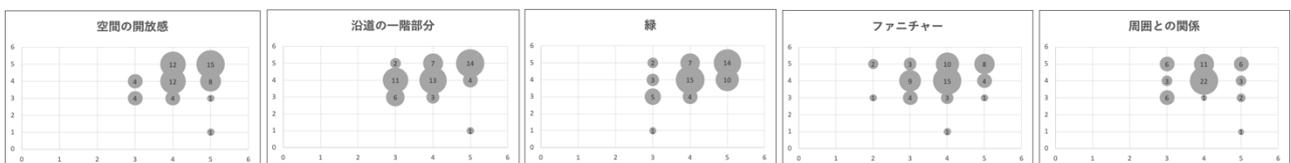


図 5. 各滞在快適性指標と総合評価の相関 (縦軸：総合評価 横軸：各指標の評価 円の大きさ：回答数)